

〈黄帝と老子〉雑観 第7回

## 『黄帝四経』～『春秋繁露』を貫く機械論的宇宙観

『黄帝内経』は戦国の「天道」思想を引き継ぐ（その1）

『黄帝内経』 研究家 松田博公

ツイート 1

- 第1回 [黄帝は誰のことかと黄帝は言い 『黄帝内経』は天人合一の医書である](#)
- 第2回 [『黄帝内経』は養生の書にあらず](#)
- 第3回 [『黄帝内経』はタオの医学書なのか？ 『老子』『荘子』そして『荀子』](#)
- 第4回 [『黄帝内経』に近いのは『老子』か『荘子』か  
重層的な無の宇宙論と遍満する気の宇宙論](#)
- 第5回 [勃興する戦国黄老思想 『黄帝内経』への遙かな道](#)
- 第6回 [『黄帝内経』と戦国黄老の気の系譜 『黄帝四経』から『春秋繁露』まで](#)

黄老思想とは、「黄帝」思想と、周知の「老子」を換骨奪胎し、「君主は無為、臣下は有為」に装いを変えた新「老子」思想の2本柱を立て、その周りに儒家、法家、墨家、兵家など諸子百家の学説を総合した戦国末期の一大潮流であった。そして、柱の一つ「黄帝」思想とは、天地の気の循環する運動法則に順って政治、人事を行うべしとする「天道」思想のことだというのが、浅野裕一が喝破した新説であった。この切れ味鋭く、先秦、漢代の思想史の読み替えを迫る学説は、1992年、『黄老道の成立と展開』（創文社）の刊行によって知られるところとなったが、日中の中国学の大家たちは、まだ受け入れてはいないようである（日本では、若手研究者、鈴木達明がこの論旨を踏まえて黄老文献の言語学的分析をしているほか、在日中国人研究者、海龍の論文「黄老思想に関する一考察」〔横浜国際社会科学研究所 第18巻第3号、2013年9月〕に影響が見られる）。

「黄帝」思想とは「天道」思想であるという浅野の理解は、そのまま『黄帝内経』の理念と構造を言い当て、『黄帝内経』がなぜ「黄帝」の名前を冠するかについて、神話的帝王への仮託という定説を覆すに足る素材であると思える。現存の『黄帝内経』（『素問』『靈樞』を総称し便宜的



今週号のPRの部屋はこちら

- 在宅ケア実践セミナー (2014/9/14,15)
- 変形徒手矯正術セミナー (2014/12/7)

■ヒューマンワールドのセミナー

- [ダイエット・アロママッサージセミナー](#) (2014/8/24)
- [クリニカルストレッチセミナー](#) (2014/10/5)

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

■投稿原稿募集

週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

★詳細は>>> [こちら](#)

にそう呼んでおく)を中国古代思想史の流れの中で読み解くためには、「黄帝」思想および黄老文献の系譜からとらえないわけにはいかないと、わたしが考えた理由である。この立場から、今回は、初期の黄老文献である戦国期の『黄帝四経』の気の思想が、それ以降、先秦から漢代の百数十年間にわたり、その時点、時点での思潮の総合であった『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』などの黄老文献に継承されており、それが『黄帝内経』の気の思想そのものであることを論証した。

今回は、浅野が発掘した「黄帝」思想の核心、つまり天地四時の運行の法則に合わせて事を行えと教える「天道」思想が、これら戦国・秦漢の潮流を形づくった黄老文献にどのように受容されているのかを検証する。最終的な目標は、いうまでもなく、黄老文献の「天道」思想が、100年を超える歴史を経て、『黄帝内経』に引き継がれていること、『黄帝内経』とは間違いなく黄老文献であることを確認することである。記述に際しては、煩を厭わず、各書からたくさん文章を引用している。読みやすさよりも、今後、このテーマで読者各位が研究を進めることを期待して、資料的な価値に重点を置いて書き進めるつもりなので、労多ければ得るものも多しと、お付き合い願いたい。

古代「天道」思想は、殷代の慣習的思考を引き継ぎながら周代に始まる、とても古い意識形態である。それには、①天を人格神と捉え、悪い政治を行えば、天罰が下るという災異説の要素と②天をあたかも陰陽、五行、循環の法則が貫かれた自然の天とする機械論的宇宙論の二つの要素があった。『黄帝四経』にもこれら①②が結び付いていたことを浅野は指摘している。『管子』『呂氏春秋』『淮南子』と時代が下るにつれて②の機械論的宇宙論が主調となるが、前漢中期、董仲舒編『春秋繁露』では、②の機械論的宇宙論をいっそう精緻にしつつ、同時に①の災異説を強力に打ち出している。こうした思想史の流れに、『黄帝内経』の「天道」思想を位置づけようとするのが、本稿の狙いである。

#### ◇天は機械論的宇宙と神との矛盾的同一性だった

さて、『黄帝四経』には、前回見たように、天地の気の交合によって万物が生み出されるという、気の生命観、自然観がうたわれていた。

「天(気)の精微なるを得て、地気の発するを待てば、すなわち萌え出ざるべきものは萌え出で、撃(=持ち上がるべき)ものは持ち上がる。天に因(よ)るならばこれ成る。因らなければ成らず、(地が)養わなければ生ぜず」(『十大経』)

★メディカル求人天国  
鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は»» [こちら](#)

■ヒューマンワールドのメールマガジン「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★配信登録は»» [こちら](#)

それは、のちに『黄帝内経』において、「天にありては氣となり、地にありては形と成り、形と氣、相感じて万物を化生す」（『素問』天元紀大論篇）と定式化される自然主義的な機械論的宇宙観の原初的な説明であった。この天地の自動運動するメカニクな本質を宇宙の秩序の紀律と捉え直し、政治から労働、生活まで順うべき基準とするという「天道」思想は、『黄帝四経』において、次のように語られている。

「天地には恒常（＝不変の紀律性）あり」（『経法』）

「天を天とせざれば則ちその神を失い、地を地とせざれば



『管子』（四部叢刊初編）

ば則ちその根を失う。四時（＝春夏秋冬）の度（＝規律）に順わざれば則ち民は疾む」（『経法』）

「四時に度あるは、天地の理（＝摂理）なり。日月星辰に数（＝法則性）あるは、天地の紀なり。…一は立て一は廃し、一は生じ一は殺し、四時代わる代わる正（しゅ）たりて（＝春夏秋冬、成長収蔵、季節ごとに主人公が入れ替わり）、終わりにて復た始まる（＝永劫に循環している）」（『経法』）

「日は明をなし、月は晦（かい、＝暗さ）をなす。（天も人も同じく）昏くして休み、明るくして起く」（『称』）

「天に順う者は昌え、天に逆らう者は亡ぶ。天道に逆らうことなれば、則ち守る所を失わず」（『十大経』）

このとき、天および天地とは、一定の摂理をもって自動運動する非人格的な機械的宇宙である。ところが、その天道が指示する紀律に従わず、逆らえば、機械的宇宙は、神格性を露わにして恐るべき災いを降ろす。

「凡そ禁を犯し、理を絶たば、天誅必ず至る」（『経法』）

「天には固（もと）より奪うあり予（あたう）るあり、祥あり不祥あり、天予うるも受けざれば、反つてもって殃（おう、＝災い）にあう」（『十大経』）

天とは、機械的に黙々と営周する自然と地上の支配者の不善に天罰をくだす神格との矛盾的同一であり、神格的存在が四時循環の機械的紀律性を取るのである。中国古代の天は、二元的で混沌とした観念の複合体であっ

た。

◇「天に順う」から「天に法る」へ

では、それに続く黄老文献に「天道」思想はどのように引き継がれたのだろうか。まずは、機械的宇宙論の側面から考察しよう。斉国の『管子』には次のようにある。

「その功、天に順う者は天これを助け、其功、天に逆う者は天これを違わす。天の助けるところ、小なりと雖ども必ず大なり、天の違うところ、成ると雖ども必ず敗る。天に順う者は其の功あり、天に逆う者は其の凶を懷し、復び振わざるなり」（『管子』形勢）

「四時の事、備わりて、民の功は百倍す。故に春は仁、夏は忠、秋は急、冬は閉。天の時に順い、地の宜しきにし約し、人の和を忠す。故に風雨は時あり、五穀は実り、草木美多く、六畜蕃息す。国富も兵強く、民材して令行われ、内に煩擾の政なく、外に強敵の患なきなり」（『管子』禁藏）

『管子』は、「天に順う」「天に逆らう」という『黄帝四経』の文言をそのまま継承して論を立てているようである。「天に順う（天命に順う）」生き方は、なすべき当為として語られている。

しかし、続く秦国の『呂氏春秋』からは、「天に順う」当為は、より複雑な説明と脈絡のもとで議論されるようになる。それとともに、『黄帝四経』流の「天に順う（天命に順う）」という直截で断言命題的な言い方は、「天に法（のつと）る（＝天の法則性をモデルとする）」という含蓄のある表現に代わる傾向がある。



「順天（天に順う）」と「法天（天に法る）」の出現実数を見ると、『管子』では6対5で「順天」が多く、『呂氏春秋』では2対2と同数になり、漢代の『淮南子』では1対2、『春秋繁露』4対8と後代になるにつれて、「法天」が多い。たまたまそういう結果になったのか、こんなことはだれも調べたりしないだろうが、わたしには興味深い数字である。具体的に『呂氏春秋』の文章をみてみよう。

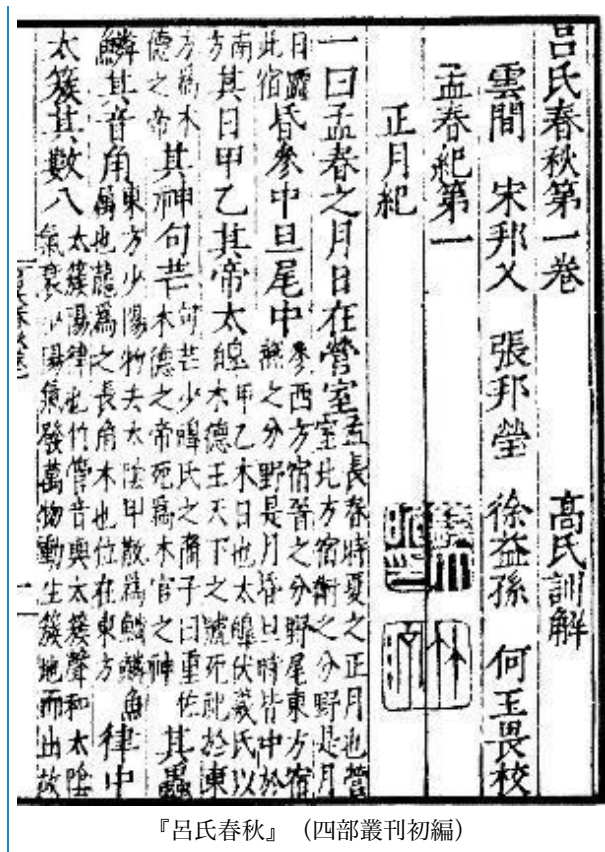
「蓋し聞く、古（いにしえ）の清世は、是れ天地に法る。凡そ（ここにまとめた）十二紀なるもの（『呂氏春秋』）は、治乱存亡を紀すゆえん（＝手段）なり、寿夭吉凶を知るゆえんなり。上はこれを天に揆（はか）り、下はこれを地に驗（ただ）し、中はこれを人に審（つまびらかに）す。此の若くすれば、則ち是非、可不可、遁（のが）るる所なし。天を順といい、順なれば維（こ）れ生く（＝天道に順えば生長する）、地を固といい、固なれば維れ寧（やす）し（＝固い意志を持てば安寧である）。人を信といい、信なれば維れ聽（したが）う（＝信を以てすればみな従う）。三者咸（みな）当れば、無為にして行われる。行うとはその数（すう）を行うなり（＝法則性に則る）。その数を行い、その理（＝摂理）に循（したが）い、その私を平にするなり（私欲を去ることである）」（『呂氏春秋』季冬紀・序意）

「天に順う」生き方と、「天に法る」生き方に、大きな違いはないとはいえ、微妙な変化が感じられる。同じく『黄帝四経』の「天道」思想の系列だとしても、法を統治の主体と考える法家思想がより強く意識されるようになった時代背景の反映かもしれない。ますます複雑化する国家機構や統治政策、そして人生の諸相と「天道」の法則とを結びつけるためには、「天に法る」とした方が柔軟に考察できたのかもしれない。

#### ◇多岐に練り上げられていく順天、法天の思想

それを念頭に、先に進もう。『淮南子』である。

「聖人の事窮まりて更（あらた）めて為（つく）り、法弊（やぶ）れて改めて制するは、古を変え常を易えるを楽しむに非ざるなり。将に以て敗を救い衰を扶（たす）け、淫を黜（しりぞ）け非を濟（とど）めて、以て



『呂氏春秋』（四部叢刊初編）

天地の気を調べ、万物の宜（よろ）しきに順わんとするなり。聖人は、天が覆（おお）い地が載（の）せ、日月が照し、陰陽が調い、四時が化して（＝変化して）、万物同じからざるがごとく、故（こ、＝古いということ）なく新しく、疏（そ、＝疎遠であること）なく親（しん、＝親密であること）なし。故に能く天に法る」（『淮南子』泰族訓）

「聖人は天に法り情に順い、俗に拘（かか）わらず、人に誘（いざな）わ）れず、天を以て父と為し、地を以て母と為し、陰陽を綱と為し、四時を紀と為す。天は静かにして以て清く、地は定まりて以て寧（やす）し。万物これを失う者は死し、これに法る者は生く。夫れ静漠は神明の宅なり。虚無は道の居る所なり。是の故に、或いはこれを外に求むる者は、これを内に失い、これを内に守ることある者は、これを外に有（う）る。譬（たと）えば、猶（なお）本（もと）と末のごときなり。本よりこれを引けば、千枝万葉、髓わざる莫きなり」（『淮南子』精神訓）

「天地は以て分を設（もうけ）て陰陽と為す。陽は陰に生じ、陰は陽に生ず。陰陽相い錯（まじ）わりて、四維（＝天地の乾（北西）・坤（南西）・巽（南東）・艮（北東）の四つの方角）乃ち通じ、或は死し、或は生じて、万物乃ち成る。岐行喙息（きこうかいそく、肢で歩くもの、くちばしで息をするもの＝あらゆる生物）、人より貴きは莫く、孔竅肢体（こうきょうしたい）、皆、天に通ず。天に九重あり、人また九竅あり。天に四時（＝春夏秋冬）ありて、以て十二月を制し、人また四肢ありて、以て十二節を使う。天に十二月ありて、以て三百六十日を制し、人また十二肢ありて、以て三百六十節を使う。故に事を挙げて天に順わざる者は、其の生に逆う者なり」（『淮南子』天文訓）

これらの文章からいえることは、「天に順う」「天に法る」内容が、いっそう多岐にわたり練り上げられていることである。単に天地陰陽の気の循環に法り政治、人事を行うのみでない。天地と人の身体、精神・霊性は構造と機能、数も同じだという新たな思想が現れている。もはや、「天に順う」「天に法る」と言うだけでは尽くせないほど、人と天地は一体だという天人合一の観念が、どんどん複雑かつ実践的に語られるのである。

「故に大人なる者は、天地と徳を合し、日月と明を合し、鬼神と霊を合し、四時と信を合す。故に聖人（＝帝王のこと）は天気を懷（いだ）き、天心を抱き、中（ちゅう）を執り和を含み、廟堂を下らずして四海を行（めぐ）り、習を変え俗を易（か）え、民の化して善に遷（かえ）ること、これを己に性にするがごとく（＝自己の性によって自然にそうなったかのようにする）、能く神を以て化す（＝霊性によって感化する）なり」（『淮南子』泰族訓）

だが、表現のバリエーションは豊かになったとしても、そこに貫かれているのが、『黄帝四経』以来の「天道」思想であることは変わらない。それは、戦国、秦漢思想の総決算である『春秋繁露』においてさらに鮮明である。

## ◇全巻これ「天道」思想の『春秋繁露』

『春秋繁露』は、前漢の武帝に儒学独尊の政策を勧めた儒者、董仲舒の編纂によるものとされ、従来は儒学の視点からのみ研究されてきた。しかし、一読して分かるように、『春秋繁露』の儒学と『論語』の儒学では、文体も気風も構成も、月とスッポンである。ところが、歴代の中国学者は、中国古代思想の正系は儒学であるという前漢末～後漢の儒学イデオロギーによる歴史の改竄に目をくらまされ、『論語』から『孟子』『荀子』『春秋繁露』へと直線的な系譜を想定し、『春秋繁露』の解読に失敗してきた。事實は、戦国から漢代中期まで、中国古代思想の主流の水源は、黄老道家や老荘道家など、今で言う道家思想だったのである。



『春秋繁露』は、時代を領導してきた黄老思想に対抗し、儒家思想を一挙に浮上させるために、漢代思想の総結集を意図している。基軸はもちろん儒家思想だが、墨家や法家、医家、養生家、暦法、天文、術数など当時のあらゆる意識形態を取り込み、黄老思想を大幅に吸収している。黄老思想はこの天才的な総合思想書『春秋繁露』に遺伝子を遺すことによって使命を終える。『春秋繁露』には、政治的に実効性を持っていた黄老思想の最後の輝きが見える。黄老の成果を篡奪し、時代思潮を黄老から儒学へと転換させた結節点が『春秋繁露』なのである。

この大部の書物に、「順天」と「法天」の語彙の出現頻度は少ない。前述の通り、わずかに12カ所である。では、「天道」思想の影は薄いのかというと、逆である。『春秋繁露』は、全巻これ「天道」思想の結実なのである。全81篇から、「官制象天」「為人者天」「天容」「天弁在人」「陰陽位」「陰陽終始」「陰陽義」「陰陽出入上下」「天道無二」「四時之副」「同類相動」「人副天数」「循天之道」「天地之行」「如天之為」「天地陰陽」「天道施」など、17篇の篇題を挙げるだけで、それは推し測れるだろう。「五行相勝」「五刑相生」「五行逆順」「治水五行」「治乱五行」「五行變救」「五行五事」など五行論から天地人の気の運動法則を把握する内容がうかがえる篇題を合わせれば、24篇にもなる。素材は無数にあるが、二つの篇からだけ引用する。

「王者の官を制する（＝王が官僚制度を整える際には）、三公、九卿、二十七大夫、八十一元士、凡そ百二十人にして列臣備わる。吾聞く、聖王の取る所の儀は、天の大経（＝大いなる紀律）に法るなり。官制もまた然るは、此れ其の儀か。天の大経は、三ヶ月で一つの季節になり、四季で

一年になるように、三から始まり四の展開を示して完了するが、この官制は三の倍数と公、卿、大夫、元士の四等級からなっている] 三人にして一選を為すは、[天が] 三月にして一時を為すに儀 (のつと) るなり。四選にして止むは、[天が] 四時にして終るに儀るなり。三公は、王の自から持する (= 掌握する) ゆえん (= 手段) なり。天は三 (= 天地人) を以て之を成し、王は三を以て自ら持す。立ちて数を成して以て植を為し (= 天が定めた数になぞらえて事業を定着させ)、而して四以て之れを重ぬれば、其れ以て失無かる可し。天数を備え以て事に参ずるは、治 (= 政治)、道に謹しむの意なり」 (『春秋繁露』官制象天)

#### ◇養身、房事、導引の術も「天道」に法る

こうした天数と官僚制度の数を一致させる機械論的宇宙論の論理は、そのまま身を養い、男女の生殖を規制する論理に移し入れられる。

「天の道に循いて、以て其の身を養う、之を道と謂うなり。 (中略) 天に両和ありて以て二中 (= 冬至、夏至) を成す。歳は其の中に立ち、之を無窮に用う。是の故に北方の中 (= 冬至)、合陰を用いて物始めて下に動く。南方の中 (= 夏至)、合陽を用いて、物始めて上に養わる。其の下に動く者は、東方の和を得ざれば、生ずる能はず。中春 (= 春分)、是れなり。其の上に養わるる者は、南方の和を得ざれば、成る能はず。中秋 (= 秋分)、是れなり。然れば出ち天地の美悪、両和 (= 生ずる春分と成らせる秋分) の処に在り。(中略) 中は、天地の終始する所なり。而して、和は天地の生成する所なり。夫れ徳は和より大なるはなし。而して道は中より正しきはなし。中なる者は天地の美、達理にして、聖人の保守する所なり。『詩』に云ふ、「剛ならず柔ならず、政を布くこと優優たり」と。此れ中和の謂いに非ずや。是の故に能く中和を以て天下を理 (おさ) むる者は、其の徳大いに盛んなり。能く中和を以て其の身を養う者は、其の寿、命を極む。

男女の法 (= 房事) は、陰と陽とに法る。陽気は北方に起り、南方に至りて盛んなり。盛極まりて陰に合す。陰気は中夏に起り、中冬に至りて盛んなり。盛極まりて陽に合す。盛んならざれば合せず (= 天地の気の運行がそうであるように、男女も精力が高まらなければ交わらないものである)。是の故に六月にしてひとたび俱に盛んに、終歳にして乃ち再び合す。天地の節、此れを以て常と為す。是の故に法 (= 天地の道) の内 (= 房事) に先んず。身を養いて以て全うするには、男子をして堅牡ならざれば家室あらず、陰 (= 女子)、盛を極めざれば相接せざらしむ。是の故に身、精明なれば、衰え難くして堅固に、寿考、忒 (たが) うなし。是れ天地の道なり。(中略)

天に法る者は乃ち人の弁 (= 正しい身の処し方) に法る。天の道、秋冬に向かいて陰来たり、春夏に向かいて陰去る。是の故に古の人は霜降りて女を迎え、氷解けて殺止す (= 止める)。陰と俱に近づき、陽と俱に遠ざかるなり。天地の気は、盛満を致さざれば、陰陽を交へず。是の故に君子は甚だ気を愛して謹んで房に遊びて以て天を体するなり。気、盛を以て通



ずるに傷つかずして、不時・天井に傷つく。陰陽と俱に往来せざる、之を不時と謂い、其の欲を恣（ほしいまま）にして天を顧みざる、之を天井と謂う。君子の身を修むる、敢えて天に違（たが）わず。是の故に新牡は十日にして一たび房に遊び、中年は新牡に倍す。始めて衰ふる者は中年に倍す。中衰の者は始めて衰ふるに倍す。大いに衰える者は月を以て新牡の日に当てて、上に天地と節を同じくするなり。此れ其の大略なり」（『春秋繁露』循天之道）

さらにマッサージ技術さえもが、「天道」の法則に法るものと説明される。

「故に仁人の寿多き所以（ゆえん、＝理由）の者は、外は貪（むさぼ）るなくして内は清浄に、心は和平にして中正を失せず。天地の美を取りて以て其の身を養へばなり。是れ其の且つは多く且つは治まるなり。鶴の寿なる所以の者は、氣を中に宛（ふさ）ぐなし。是の故に食、水（とどこおら）ざればなり。猿の寿なる所以の者は好んで其の末に引く。是の故に氣四越すればなり（＝氣が四肢に流れる）。天の氣は常に下、地に施す。是の故に道者もまた氣を足に引き、天の氣は常に動きて滞らず。是の故に道者はまた氣を宛がず。氣あたかも治めずんば満つと雖も必ず虚なり（＝氣は治めなければ、からだに充滿していても働きに力がないものである）。是の故に君子は養いて之を和し、節して之を治め、其の群泰（＝多くの過剰さ）を去り、其の衆和（＝多くの中和）を取る。高台は陽多く、広室は陰多く、天地の和より遠ざかるなり。放に聖人は為さずして（＝それらを作らずに）、中に適（かな）うのみ。人の八尺に法れば、四尺は其の中なり。宮は中央の音なり。甘は中央の味なり。四尺は中央の制なり。是の故に三王の礼は、味は皆甘を尚び、声は皆和を尚ぶ。其の身を常以て（＝常に）自ら天地の道に漸（ぜん、＝浸す）す所に処（お）く。其の道は類を同じくす（＝尺、味、声も身も類は同じ）、一氣の弁（＝治）なり」（『春秋繁露』循天之道）

これらを見るだけでも、『春秋繁露』の「天道」思想が、一年を四季で分割する天の数のリズムに合わせて官僚制度を整え、身を養い、導引按蹠を行い、房事を図り、食べ物、音楽までも天に法るといふ、森羅万象ごとく天の運動と構造、機能に結びつける「天道」原理主義になっていることが分かる。とはいえ、それは『黄帝四経』から、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』を経て、一筋に成長してきた自然主義的な機械論的宇宙論の構想にほかならない。それが天地を統べる数のマジカルな威力に依拠する数術を借りて、いっそう精密に構造化され、宇宙から身体まで包摂する巨大な論理に肥大化したのである。先に見た『淮南子』の天人の合一性を天数になぞらえる記述も、『春秋繁露』人副天数では、さらに徹底していて、『黄帝内経』の天数論とも酷似するが、それについては『黄帝内経』の数術論として、別稿でまとめて議論しよう。

さて、議論はまだ半ばである。「天道」思想のもうひとつの顔、災異思

想が、『春秋繁露』ではどうなっているか。気になるところだが、読者の忍耐はもうとっくに尽きているだろう。続きは、次回のお楽しみとしよう。

---

 ツイート { 1 }

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

[HOME](#)

**HUMAN WORLD**  
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [お宝市場](#) | [求人天国](#)  
[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.